

石器の生産と流通にかかわる集落 —弥生時代中期の瀬戸内地方における検討—

乗松真也

はじめに

筆者は、弥生時代中期中葉～後葉の瀬戸内地方における石庖丁や石斧などの検討から各遺跡の生産や流通への関与のあり方を示してきた(乗松2020a・2020b・2022・2023)。扱った遺跡はいずれも集落遺跡と考えられ、愛媛県松山市祝谷六丁場遺跡や同文京遺跡、愛媛県西条市明穂遺跡群など愛媛県域の遺跡も含まれる。石器の生産や流通の実態に迫るためには、それを担った集落遺跡からのアプローチも必要だろう。本稿では、集落遺跡の分析をおこなうことで石器生産、流通と集落との関係について考察するうえでの見通しを得たい。

1 これまでの研究と課題

寺前直人は、両刃石斧の生産集落を重点生産型と付随生産型に分類し、付随生産型の例として岡山県岡山市南方遺跡を挙げた。付随生産型の集落は、石材産地に比較的近い、石斧の流通範囲が重点生産型に比べて狭い、他の手工業生産も併せておこなわれる、地域の中心的な集落、といった傾向をもつ(寺前2002)。森下英治は、サヌカイトや片岩を用いた多量の石器製作をおこなった香川県東かがわ市池の奥遺跡と、石器製作が小型石器に限られる同成重遺跡が至近にあることから、複数の集落のなかに石器製作担当集落を設定した。併せて提示された概念図では、石器担当集落が拠点集落である場合も拠点集落以外の集落の場合も認められる(森下2005)。田崎博之は、松山平野において密集型大規模集落、拠点的な集落、小規模集落の重層的な集落間関係を想定し、文京遺跡における「石器素材の入手や鉄器・ガラス装身具の供給は、密集型大規模集落の文京遺跡と、周辺の遺跡群内の拠点的な集落をつなぐネットワークを介したもの」とする(田崎2006、p.37)。藤田淳は兵庫県神戸市玉津田中遺跡における石器の分析から、「玉津田中遺跡は明石川流域の拠点集落として、流域の他集落とも密接な関係をも」ち、「広範な地域から入手した石器素材や製品の一部は、周辺集落へも分配された」とする(藤田2011、p.50)。

以上の研究では、石器の生産は、大規模密集型集落、拠点集落といった、地域や複数集落間において中心性をもつ集落との関連でとらえられる傾向がある。田崎が密集型大規模集落と拠点的な集落を分けていることに留意する必要があるものの、寺前や藤田による地域の中心的な集落や拠点集落は、ある程度の居住者数が想定される大規模集落と推定される。特に、田崎や藤田は、文京遺跡や玉津田中遺跡といった大規模集落の特性が石器素材の入手や、製品も含めて周辺集落への分配に反映されたとみる。一方で、大規模集落以外の集落と石器生産、流通との関係は判然としない。森下は拠点集落以外の集落も石器製作担当集落とするが、これらの集落がどのような属性をもつのか詳細は触れられず、概念図の石器製作担当集落間を結ぶ線が意味するものが示さ

れていないため、石器製作担当集落間の関係についても読み取りがたい。

こうした課題を解決するための基礎的な作業として、本稿では、集落の規模や性格にかかわらず石器の生産や流通に関与する集落を対象として検討を進める。その結果をふまえて、石器の生産や流通における大規模集落の役割や、石器生産、流通にかかわる集落の他集落との関係について言及したい。

2 研究方法と対象

本稿では、発掘調査がおこなわれた遺跡の居住遺構(竪穴建物、掘立柱建物)について時期ごとの分布状況を確認して、一時期の集落規模の把握に努める。時期の判断には各地域の弥生土器の編年を用いる。弥生時代の集落域すべてが発掘調査の対象となることはごく稀なうえ、発掘調査されても当時の遺構すべてが残存しているわけではない。このため、発掘調査範囲の周辺地形を復元することで、本来の集落域を推測する。以上の方法は、一つの土器型式がもつ時間幅や集落域の広がりなど不確定要素を多分に含むが、集落間の規模などのおおまかな比較においては有効であろう。なお、石器の生産や流通に関わる集落遺跡のうち、周辺も含めてある程度居住遺構の確認、推測が可能な遺跡を対象とする。

3 生産地、加工地、流通中継地の設定

(1) 石材、器種ごとの分類

乗松2020a・2020b・2022・2023でおこなった遺跡の分類について、検討対象とした石材、器種ごとに概要を示す。

金山産サヌカイト製石器 石庖丁の製作技術と大型剥片の有無によって遺跡類型A、遺跡類型B、遺跡類型C1、遺跡類型C2に分類した。遺跡類型Aは、石材産地またはごく近接した場所に立地し、原石の分割から金山型剥片や横長剥片、石庖丁の製作をおこなう。遺跡類型Bは、遺跡類型Aより入手した板状剥片から金山型剥片や横長剥片、石庖丁を製作する。また、石庖丁を素材として小型石器の製作もおこなう。遺跡類型C1・C2は石材産地に近接せず、石庖丁の製作をおこなわないが、遺跡類型A、遺跡類型Bより入手した石庖丁から小型石器を製作する。このうち遺跡類型C1は長さ20cmを超える大型剥片を分割し、そこで得られた剥片(小型石器の素材、または石核)を周辺遺跡に搬出する。

四国北西部における片岩製石庖丁 製作途中品の有無、石材産地からの距離、石庖丁の量から集落A1、集落A2、集落Bに分類した。集落A1は石材産地に近接し、素材の獲得から完成品までの製作をおこなう。遺跡類型A2は石材産地からやや離れて立地し、素材から完成品までの製作をおこなう。集落Bは完成品、または完成品に近い状態の石庖丁を集落A1・A2から入手する。

片岩製片刃石斧・緑色岩製両刃石斧 製作途中品の有無、石材産地からの距離、石斧の量から、集落A、集落B1、集落B2に分類した。集落Aは石材産地に近接し、素材の獲得から完成品までの製作をおこなっている。集落B1・B2は完成品、または完成品に近い状態の石斧を集落Aから入手する。このうち集落B1は他遺跡への石斧の搬出も担う。

遺跡類型				
金山産サヌカイト製石器	A	B		C1 C2
片岩製石庖丁	A1 A2			B
片岩製片刃石斧・ 緑色岩製両刃石斧	A		B1	B2
	生産地	加工地	流通中継地	消費地

図1 生産地、加工地、流通中継地、消費地の設定

(2) 生産地、加工地、流通中継地、消費地の設定

石材や器種ごとにおこなった遺跡の分類を、それぞれ生産地、加工地、流通中継地、消費地として再設定する(図1)。

生産地 石材産地付近、または石材産地からやや離れた場所で初工程から完成品までの製作工程を担う。金山産サヌカイト製石庖丁の遺跡類型A、四国北西部における片岩製石庖丁の集落A1・A2、片岩製片刃石斧・緑色岩製両刃石斧の集落Aが該当する。

加工地 石材産地付近、または石材産地からある程度離れた場所に位置する。生産地で製作された板状剥片などを搬入して完成品までの製作工程を担う。剥片や完成品を搬出する。金山産サヌカイト製石庖丁の遺跡類型Bが該当する。

流通中継地 石材産地から離れた場所にあり、石材産地との間には生産地が立地する。完成品、または完成品に近いものを搬入、搬出する。片岩製片刃石斧・緑色岩製両刃石斧の集落B1が該当する。

消費地 石材産地から離れた立地で、石材産地との間に生産地、加工地、流通中継地が存在する。金山産サヌカイト製石器では剥片や完成品、その他の石器では完成品、または完成品に近い状態のものを搬入する。金山産サヌカイト製石庖丁の遺跡類型C1・C2、四国北西部における片岩製石庖丁の集落B、片岩製片刃石斧・緑色岩製両刃石斧の集落Bが該当する。

4 生産地、加工地、流通中継地の集落

(1) 検討方法

2で設定した類型のうち、生産地、加工地、流通中継地は石器の生産や流通にかかわる遺跡である。これらの遺跡は、竪穴建物や掘立柱建物が存在、または存在が推定されることから居住域を含めた集落^{*1}であると考えられる。本節では特に竪穴建物や掘立柱建物で構成される居住域から生産地、加工地、流通中継地の集落規模について検討する^{*2}(図2)。なお、取り上げる遺跡はいずれも集落域すべてが調査されたわけではないため、周辺の微地形復元と合わせて居住域の位置や規模の推定を試みる。

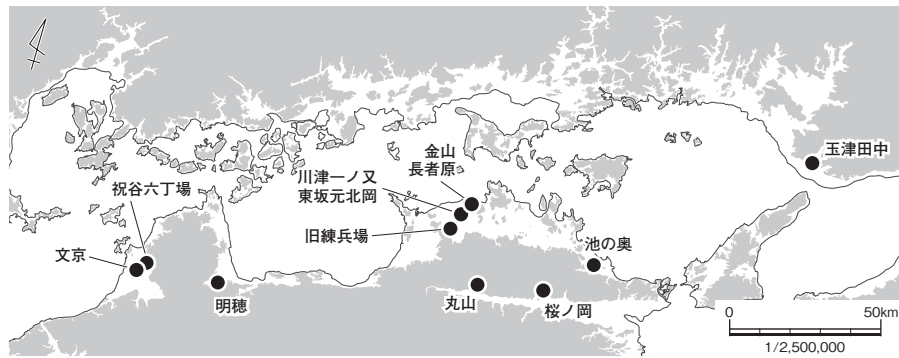


図2 対象遺跡

(2) 生産地の集落

(a) 金山遺跡、長者原遺跡 サヌカイト製石器の生産地

サヌカイト原産地である金山の北麓には大量の金山型剥片が散布しており、香川県坂出市金山遺跡の部分的な発掘調査でも金山型剥片の堆積が確認されている(金山遺跡北1地点)。金山遺跡での金山型剥片と共伴する弥生土器は確認されていない。他の遺跡で出土する金山型剥片の上限は弥生時代中期前葉、下限は後期前葉の可能性を含みつつ、確実なのは中期中葉～中期後葉であるため^{*3}、金山遺跡北1地点に堆積する剥片は中期中葉～後葉を中心とする遺物とみていいだろう。なお、北1地点で竪穴建物などの遺構は確認されていない。東麓の発掘調査地点(金山遺跡東1・東2)でも金山型剥片の出土が報告されているが、現状の散布量を考慮すれば金山型剥片の分布の中心的な範囲は北麓とみて間違いはない(森下2002、p.149)。これらの地点では石庖丁や打製石剣の完成品は出土していない。南麓斜面の香川県坂出市長者原遺跡では調査範囲は狭小ながらも中期後葉の竪穴建物1棟が検出されており、調査地外も含めても推測される竪穴建物の最大棟数は数棟程度だろう。長者原遺跡では金山型剥片剥離技術に伴う一連の工程の資料と石庖丁の完成品が出土している。

金山では石庖丁生産の初工程から完成品までを担い、完成品にくわえて板状剥片や金山型剥片、石核の各工程の資料を搬出していると考えられるが、この根拠となっているのは長者原遺跡の資料である(乗松2020a)。ただし、金山遺跡北1地点周辺の北麓から北西麓にかけての状況からは、金山の各地点において生産工程や搬出する石器が異なっている可能性もある^{*4}。長者原遺跡では中期後葉の竪穴建物1棟から数棟程度からなる居住域を推定できるが、他地点では弥生土器が出土や散布が確認されていない現状で居住域の存在を推測することは難しい。仮に居住域があったとしても、長者原遺跡と同程度と考えるのが妥当であろう。少なくとも金山では大規模な居住域の存在や多数の居住遺構が分布する状況は認められない(図3)。

(b) 桜ノ岡遺跡 珪質片岩製石庖丁、青色片岩製片刃石斧、緑色岩製両刃石斧の生産地

徳島県阿波市桜ノ岡遺跡は吉野川北岸の段丘上の緩斜面に位置する。調査地がおこなわれた尾根をそれぞれ西尾根、東尾根とすると、西尾根は両隣の尾根に比して広く、調査地の東半分の範

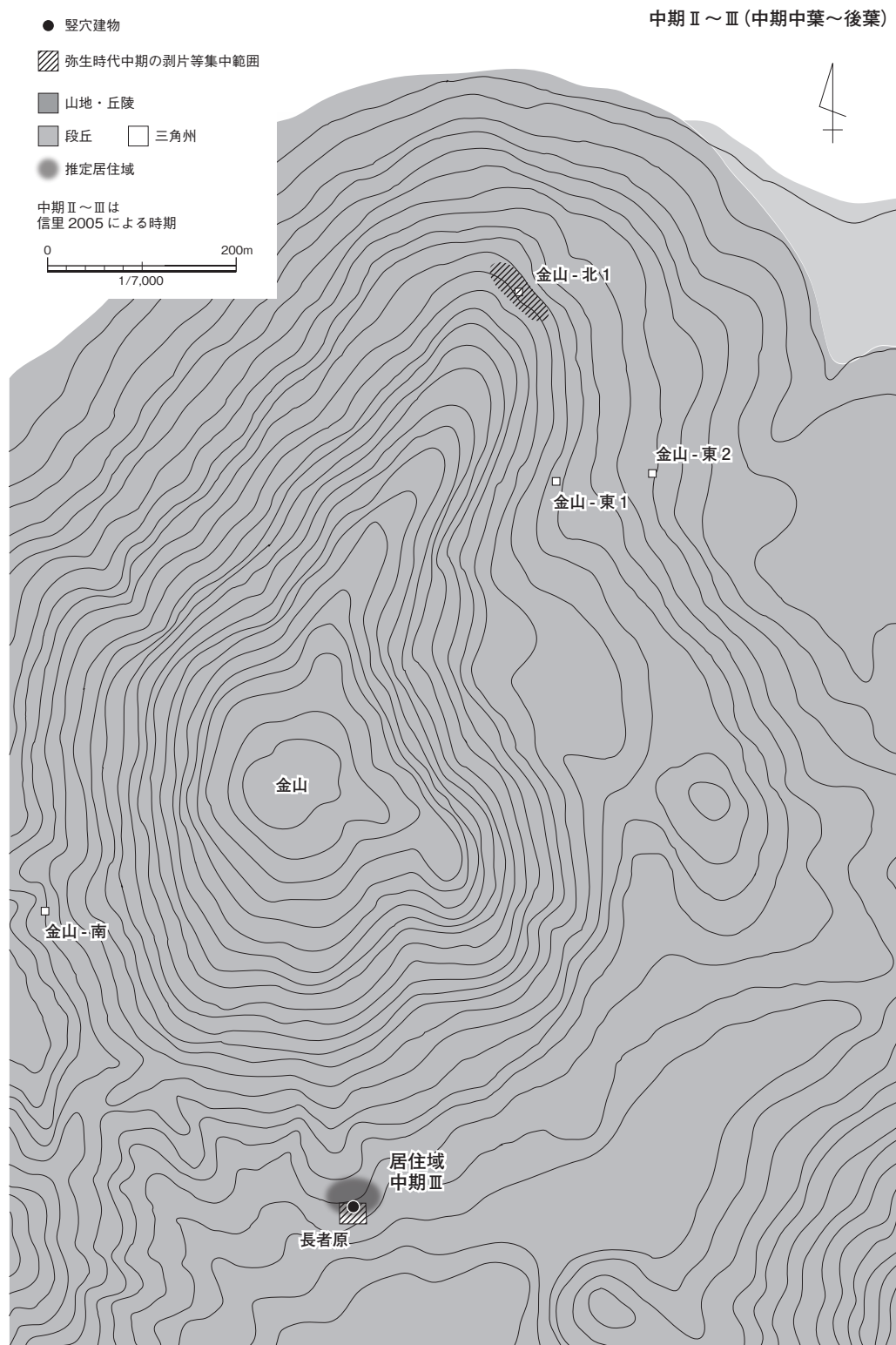


図 3 金山遺跡、長者原遺跡の居住域

囲に竪穴建物、掘立柱建物が分布し、狭小な東尾根の調査地では遺構が検出されていない。Ⅲ様式(中期中葉、ここでの時期は近藤2004による)には竪穴建物6棟、掘立柱建物1棟が存在し、時期特定が困難な建物もこの時期の可能性もある。これらの建物は調査地北東部でも南東寄りに集中するため、調査地から尾根先端方向にかけて居住域が広がると推定される。Ⅳ-1様式(中期中葉)には竪穴建物が2棟と前段階に比べて減少する。竪穴建物は調査地北西端部、南東端部に位置することから、居住域は竪穴建物を中心に調査地外の北西方向、南東方向にかけてと推測される。建物の重複関係と調査地外への広がりを考慮すれば、Ⅲ様式の居住域は100×80m程度の範囲に最大で同時併存の竪穴建物4～6棟程度と掘立柱建物1～2棟程度で構成されると考えられる。珪質片岩製石庖丁、青色片岩製片刃石斧、緑色岩製両刃石斧の素材、製作途中品は建物が分布する範囲から出土している。

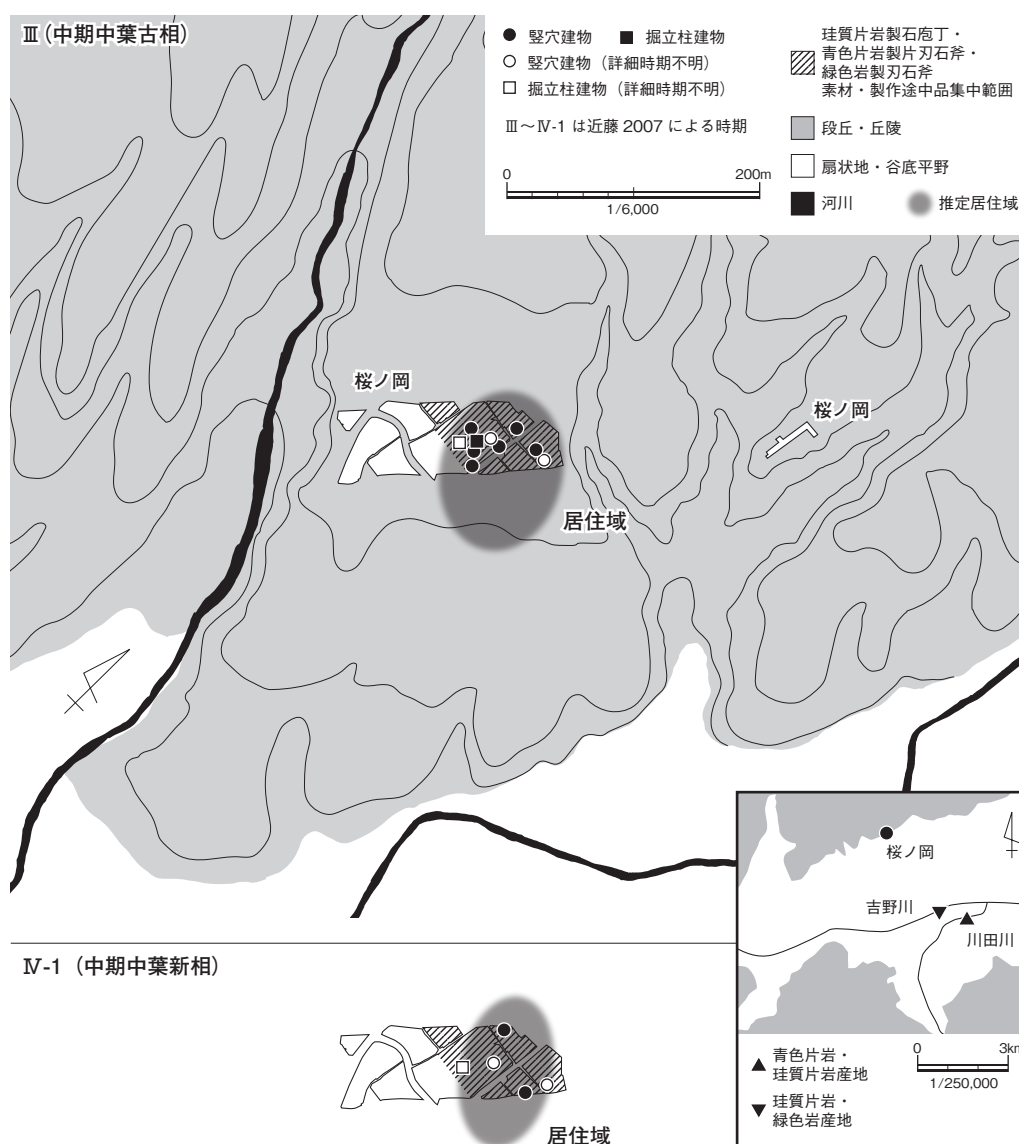


図4 桜ノ岡遺跡の居住域

桜ノ岡遺跡では、100×80m程度の範囲に点在する最大で同時併存の竪穴建物4～6棟程度と掘立柱建物1～2棟程度の居住域で珪質片岩製石庖丁、青色片岩製片刃石斧、緑色岩製両刃石斧の生産をおこなっていたと考えられる(図4)。

(c) 丸山遺跡 珪質片岩製石庖丁と緑色岩製両刃石斧の生産地

吉野川中流域の北岸には段丘が形成され、南へ張り出した段丘の緩斜面上に徳島県みよし市丸山遺跡が、その東方で南に張り出した段丘上に同大谷尻遺跡が立地する。丸山遺跡ではⅢ～Ⅳ-3様式(中期中葉古相～中期後葉新相、ここでの時期は近藤2004による)の竪穴建物と掘立柱建物が検出されている。建物の位置や周辺の地形から調査地の北方と南方にも建物が展開するとみられ、この範囲が居住域と推定される。東側の尾根上で調査された大谷尻遺跡のⅤ-1様式(後期前葉)の建物分布を勘案すれば、どちらかといえば調査地から南方の尾根先端方向にかけて建物が広がると考えられる。Ⅲ様式(中期中葉古相)には調査地の北端と南端に竪穴建物1棟ずつが位置するため、これらを中心に調査地の北方、南方にかけての範囲が居住域と推定される(居住域①)。Ⅳ-1様式(中期中葉新相)、Ⅳ-2様式(中期後葉古相)には調査地の中央部を中心に竪穴建物の棟数が増加し、時期特定が困難な竪穴建物と掘立柱建物も同時期とみられる。竪穴建物の位置からは調査地外の北方と南方にも建物が広がる蓋然性が高い。Ⅳ-3様式(中期後葉新相)には調査地南端部に竪穴建物1棟のみとなり、調査地より南方にかけての小規模な範囲が居住域①と推測される。

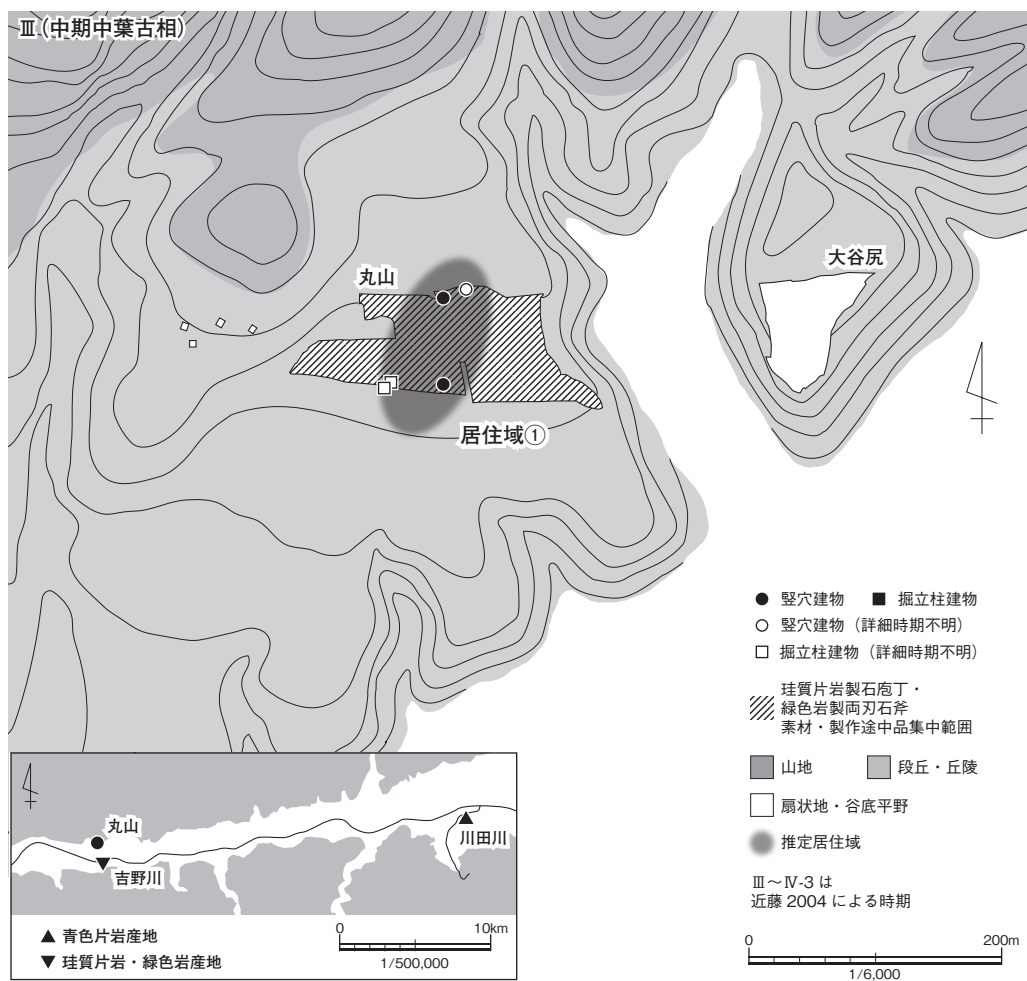
大谷尻遺跡で検出された10棟以上の竪穴建物はⅤ-1様式(後期前葉)に位置づけられる。ただし、調査地からは少量ながらⅣ-3様式(中期後葉新相)の土器も出土しているため、調査地のやや北方に小規模な居住域の存在が考えられる(居住域②)。Ⅳ-3様式は丸山遺跡での建物が減少する時期で、丸山遺跡から大谷尻遺跡に居住域が移りつつある段階ととらえることができる。

丸山遺跡の居住域①では、建物の重複関係と調査地外への広がりを考慮すれば、150×150m程度の範囲に最大で同時併存の竪穴建物7～10棟程度と掘立柱建物1～2棟程度で構成される居住域が推定される。珪質片岩製石庖丁、緑色岩製両刃石斧の素材、製作途中品は建物群が分布する調査地から出土しており、この居住域で珪質片岩製石庖丁と緑色岩製両刃石斧が製作されていたようだ^{*5}。なお、Ⅴ-1様式を主体とする大谷尻遺跡でも珪質片岩製石庖丁や青色片岩製片刃石斧などは出土しているが、緑色岩製両刃石斧の製作途中品は認められないため、大谷尻遺跡は両刃石斧の製作にかかわっているとはいえない。この点は丸山遺跡との時期差による可能性がある(図5)。

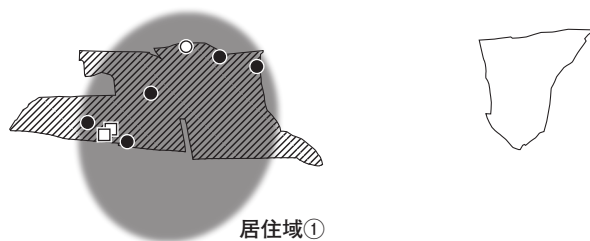
(d) 祝谷六丁場遺跡とその周辺 緑色片岩製石庖丁、緑色片岩製片刃石斧、緑色片岩製両刃石斧の生産地

松山平野北部の祝谷地区では、丘陵斜面や永谷川などにより形成された谷底平野などに弥生時代中期中葉を中心とした遺跡が点在している。このような状況を、柴田は「小規模な集落が(中略)祝谷全体で一つの集合体を形成している」(柴田2008a、p.231)と理解する。

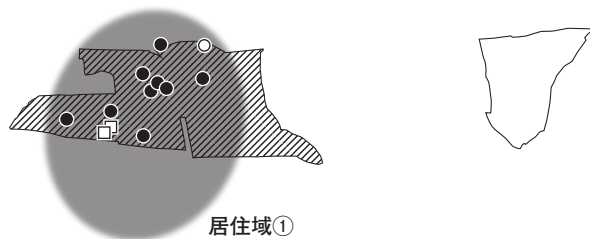
祝谷六丁場遺跡は永谷川右岸の斜面に位置し、調査地内で竪穴建物3棟が検出されている。削



Ⅳ-1 (中期中葉新相)



Ⅳ-2 (中期後葉古相)



Ⅳ-3 (中期後葉新相)

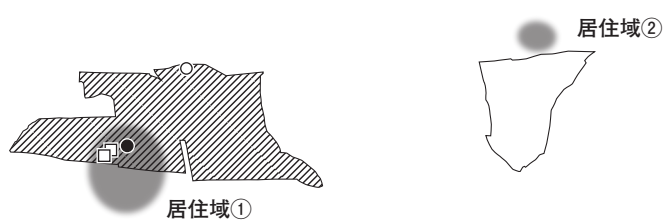


図 5 丸山遺跡周辺の居住域

平や攪乱により遺構の残存状況がよくないため、竪穴建物は調査地内においてもさらに数棟は多く存在した蓋然性が高い。また、標高の高い西方を中心に調査範囲外にも建物が広がると推測される。竪穴建物に伴う弥生土器は明示されていないものの、調査地全体から出土した土器は、Ⅲ様式(中期中葉、ここでの時期は梅本2000による)が大半で、Ⅱ様式(中期前葉)とⅣ様式(中期後葉)がわずかとなっている。よって、竪穴建物から復元される居住域はⅢ様式を中心とするとみていだろう。以上の点から、祝谷六丁場遺跡の居住域は、最大で同時併存3～5棟程度の竪穴建物で構成され则认为られる(居住域①)。調査地ほぼ全域から柱状片刃石斧、扁平片刃石斧のほか、両刃石斧、石庖丁が多量に出土している。このうち、緑色片岩製の柱状片刃石斧、片刃石斧、石庖丁には素材や製作途中品が一定量含まれていることから、祝谷六丁場遺跡は片刃石斧、石庖丁の生産地と評価できる。少数だが緑色片岩製両刃石斧の製作途中品が認められるため、緑色片岩製両刃石斧の生産も担っているようだ。なお、両刃石斧は大半が火成岩製(多くは安山岩製)の完成品であり、これらは外部から搬入されていることがほぼ確実である(加島2003、p.81)。祝谷アイリ遺跡は永谷川左岸、祝谷六丁場遺跡より上流に位置する。Ⅲ様式の竪穴建物が1棟検出されており、Ⅴ-1様式(後期前葉)の竪穴建物も1棟ある。その他の遺構や遺構に伴わない土器はⅢ～Ⅳ様式を主としてⅤ-2様式(後期中葉)までの幅がある。竪穴建物の位置や遺物の出土状況からは調査地の北方に建物が数棟広がる蓋然性が高く、この範囲を含めて居住域②とする。居住域②を構成するのは竪穴建物1～2棟程度と推測される。

愛媛県松山市祝谷丸山遺跡(本項で扱う遺跡はすべて愛媛県松山市に所在する)は、祝谷六丁場遺跡と永谷川を挟んだ対岸、永谷川と丸山川の合流地点上流の斜面に位置する。調査地から竪穴建物は検出されていないが、遺構に伴わないかたちでⅡ様式(中期前葉)～Ⅳ様式の土器が出土しているため、建物が存在するならば調査地の北方だろう(居住域③)。

祝谷西山遺跡は、永谷川右岸、祝谷丸山遺跡の100mほど下流に位置する。調査地で竪穴建物は認められないが、Ⅳ様式の土器が少量出土しているため調査地西方に同時期の小規模な居住域が推定される(居住域④)。

祝谷大地ヶ田遺跡は永谷川を挟んで祝谷西山遺跡の対岸に位置し、調査地は2か所に分かれている。いずれの調査地でも建物は検出されていない。上流の調査地では多くはないものの土器が出土しており、その時期はⅡ～Ⅲ様式であるため、調査地の北方に同時期の小規模な居住域が推測される(居住域⑤)。下流の調査地で出土している土器はⅡ～Ⅳ様式で、土器の出土量から調査地の北方には同時期の小規模な居住域が存在すると考えられる(居住域⑥)。

祝谷本村遺跡は永谷川左岸、祝谷大地ヶ田遺跡の下流に位置する。調査地で竪穴建物は検出されていないが、自然河川からⅢ～Ⅳ様式を含むⅡ～Ⅴ様式(中期前葉～後期)の土器が少量出土しているため、同時期の居住域が流路の北方に位置するとみられる(居住域⑦)。

祝谷畑中遺跡は祝谷本村遺跡の下流、永谷川左岸に立地する。調査地の一部では中期中葉の竪穴建物が確認されており、竪穴建物に近接する大溝からⅠ-3様式(前期後葉)～Ⅲ様式の遺物が比較的多く出土している。このため、竪穴建物から調査地東方にかけて同時期の居住域が広がるものとみられる(居住域⑧)。この居住域を構成する竪穴建物は数棟程度だろう。また、居住域⑨よ

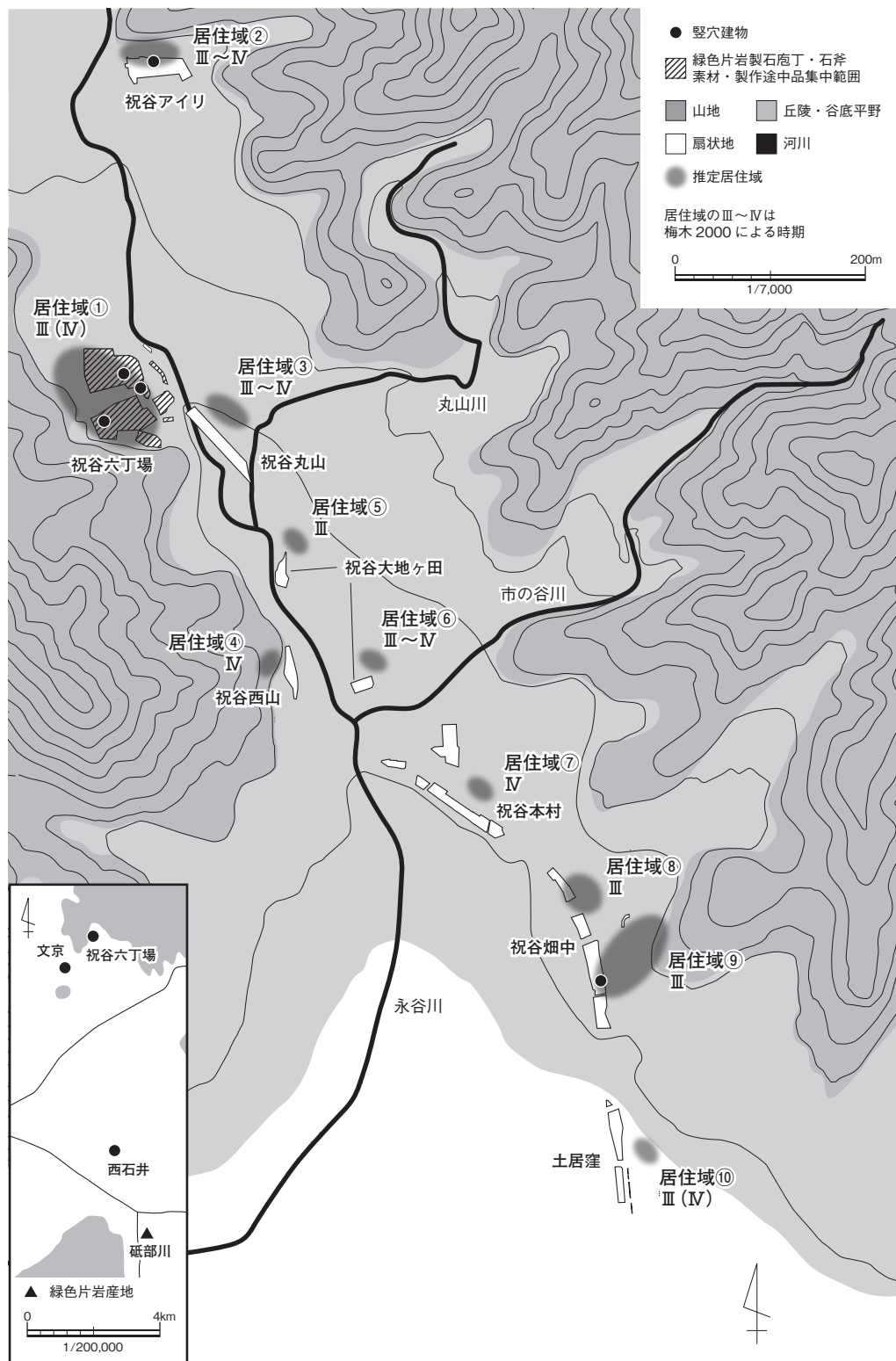


図6 祝谷六丁場遺跡周辺の居住域

り上流の調査地でも少量、Ⅲ様式の土器が出土している(居住域⑧)。

土居窪遺跡は祝谷畑中遺跡の下流、永谷川左岸に位置する。調査地で竪穴建物は検出されていないが、等高線に直交する自然河川のほか遺構に伴わないⅡ～Ⅴ様式の土器と石器が出土しているため、調査地の東方にも同時期の小規模な居住域が存在したと考えられる(居住域⑩)。

祝谷地区では、弥生時代中期中葉を中心に谷部を挟んで小規模な居住域が点在し、これらの居住域は、数棟、最大でも5棟程度の竪穴建物で構成されると推測される。緑色片岩製片刃石斧、緑色片岩製両刃石斧を製作しているのは祝谷六丁場遺跡の居住域①のみで、その他の居住域は居住域①から緑色片岩製の片刃石斧、両刃石斧が供給されているとするのが妥当であろう。緑色片岩製石庖丁についても、居住域②における中期中葉～後期前葉までの時期幅のある素材を除けば、製作途中品や素材は居住域①で出土している。このため、居住域①(祝谷六丁場遺跡)は片岩を用いて片刃石斧、両刃石斧、石庖丁の製作を担い、周辺居住域は基本的にそれらの石器を居住域①から搬入していたとみられる。祝谷地区では各居住域が関係性を有するなかで役割を分担していた可能性がある(図6)。

(e) 文京遺跡 片岩製石庖丁の生産地

文京遺跡の居住遺構を中心とした遺構分布については田崎博之による研究があり(田崎2006)、以下に述べる集落の範囲や構成などは田崎の研究成果による。松山平野北部の扇状地には谷状の凹地が網目状に広がり、低地に囲まれて複数の微高地が認められる。これらの微高地のうち、南北200m、東西700mの比較的広い微高地aに文京遺跡が立地し、推定集落域は南北150～200m、東西500mである。発掘調査がおこなわれた地点で検出された220棟以上の竪穴建物のうち80%以上が弥生時代中期後葉～後期前葉に属するとされ、これら竪穴建物の一定範囲に累積する集合として「住居群」が設定されている。大半の住居群を構成するのは竪穴建物5棟程度と掘立柱建物1～2棟程度だが、12次調査区北半部～14次調査区の住居群では構成する竪穴建物が15～20棟となっている。現状では微高地aに19の住居群が設定されており(田崎2006、p.24)、同微高地西部の未調査地や隣接する微高地bなどを含めると住居群は30近くになるとみられ、文京遺跡の集落域では竪穴建物100棟前後が併存する可能性もある。石庖丁の素材や製作途中品が集中しているのは、12次北半部～14次、16次、12次南半部～13次北部、10次、13次西部*⁶、13次東部～20次の各調査区を中心とする住居群で、前述の竪穴建物が集中する住居群を含む。このほか、低地や微高地縁辺にあたる25次や23次-9の調査区でも片岩製石庖丁の素材が若干出土しているが、地形や遺構の分布状況を勘案すれば、これらの資料は製作場所ではなく、素材の廃棄を示しているのだろう。

文京遺跡における石庖丁生産は「調査区あるいは住居群ごとの偏りは認められない」(田崎2006、p.36)とされるが、住居群が集中する空間で素材や製作途中品を含めた石庖丁が集中的に出土する傾向はある。竪穴建物の棟数に比例して石庖丁の素材や製作途中品の点数が増加している可能性もあるが、竪穴建物集中地区を中心として石庖丁の生産区域があったことは間違いなさだろう。なお、(d)で扱った祝谷地区は文京遺跡から約1.5km北西に位置する。文京遺跡が集住化する中期後葉における祝谷地区での居住域は減少しており、この時期まで残存する一部の居住域は

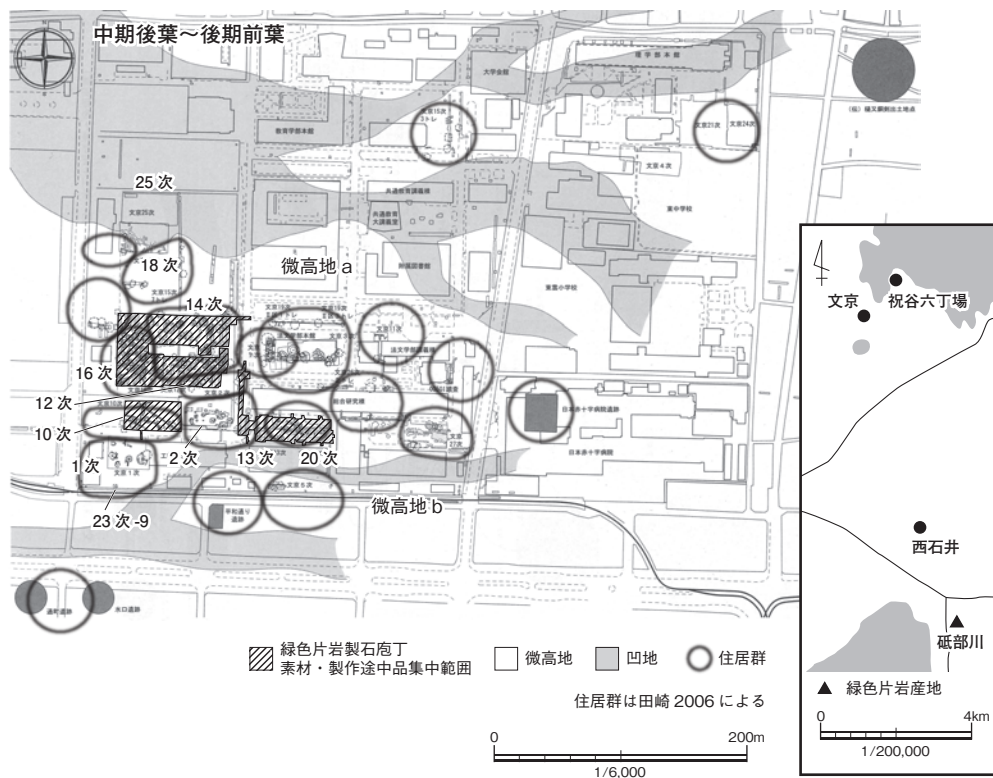


図7 文京遺跡の居住域 (田崎 2006 を一部改変)

石庖丁を文京遺跡から入手していたとみられる(図7)。

(f) 明穂遺跡群 片岩製石庖丁の生産地

明穂遺跡群(明穂中ノ岡Ⅲ遺跡、明穂Ⅰ東岡東遺跡、明穂東岡遺跡、明穂東岡Ⅱ遺跡)は丘陵尾根の先端付近に位置する。明穂遺跡群の遺構の変遷は柴田によって示されており、「大型の竪穴住居1棟と小型の竪穴住居1～3棟が一つのまとまりを形成して併存」すること、「隣接する丘陵間においても同時に併存した遺構が存在すること」、中期後葉の一時期には「3遺跡全てに同時併存遺構が展開する」ことが指摘されている(柴田2002、p.335-337)。柴田による遺構変遷と出土遺物の位置や量を勘案して推定居住域を表示したのが図8である。ここでは明穂遺跡群が位置する尾根を東側から便宜上、東尾根、中尾根、西尾根とする。東尾根と中尾根の間には比較的大きな谷が入り、西尾根から派生する中尾根と西尾根の間には小さな谷がある。

西尾根に立地する明穂中ノ岡Ⅲ遺跡では、Ⅲ～Ⅳ-1様式(中期中葉、ここでの時期は柴田2000による)と後続するⅣ-2様式(中期後葉)でそれぞれ竪穴建物1棟が確認されている。竪穴建物の西側に入る小さな谷からはⅢ～Ⅳ-3様式(中期中葉～後葉)の弥生土器を中心とする遺物が多量に出土している。遺物の出土状況を加味すれば、調査地に竪穴建物があるⅢ～Ⅳ-1様式、Ⅳ-2様式には竪穴建物の分布位置から調査地の南方にかけて竪穴建物数棟の居住域が広がると推定される(居住域①)。Ⅳ-3様式には遺物は出土していても調査地内で竪穴建物が認められないため、居住域①は調査地の南方に規模を縮小して存在すると思われる。

中尾根の明穂東岡遺跡では、Ⅳ-2様式とⅣ-3様式の竪穴建物がそれぞれ2棟、1棟分布する。これら竪穴建物の分布域から調査地南方の緩斜面地にかけて竪穴建物数棟からなる居住域が推定される(居住域②)。

東尾根の明穂東岡Ⅱ遺跡では、Ⅳ-2様式、Ⅳ-3様式の竪穴建物がそれぞれ4棟、7棟確認されている。当該期にはこれらの範囲を中心に居住域を設定できる(居住域③)。調査地内にⅢ～Ⅳ-1様式の竪穴建物は分布していないが土器がわずかに出土しているため、当該期にも調査地外の南

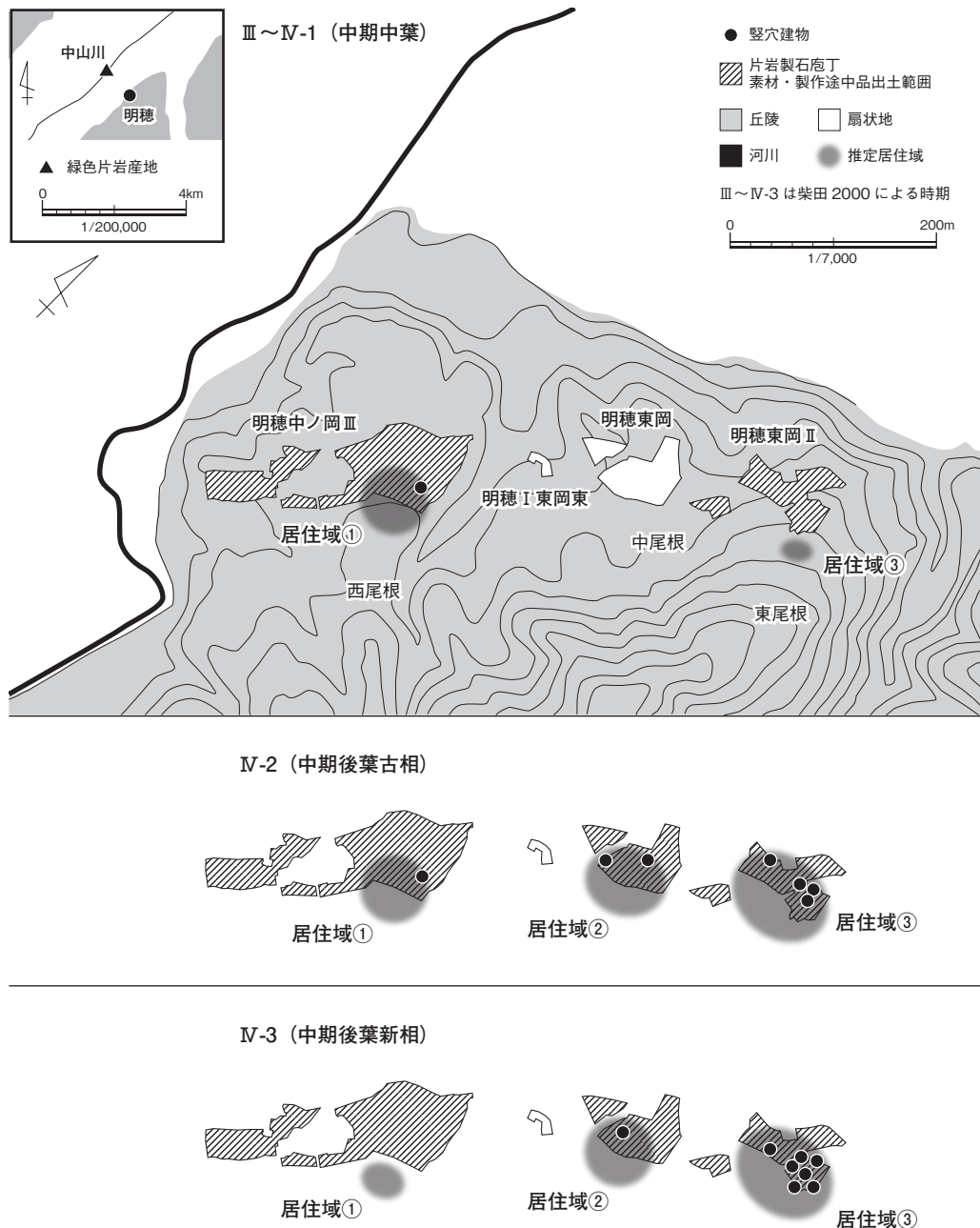


図 8 明穂遺跡群の居住域

方に小規模な居住域が存在すると考えられる。IV-3様式の居住域③では7棟の竪穴建物が分布しており、調査地外や建物の存続幅を含めると、竪穴建物の最大同時併存を7棟程度とみておきたい。なお、柴田による「大型の竪穴住居1棟と小型の竪穴住居1～3棟」のまとまりは、居住域を分解したものに該当するだろう。居住域①やIV-3様式の居住域②では最小の竪穴建物が1棟と考えられるため、明穂遺跡群での居住域は竪穴建物1棟から7棟程度で構成されることになる。

明穂Ⅰ東岡東岡遺跡を除いた各尾根の調査地からは片岩製石庖丁や緑色片岩製片刃石斧などが出土しており、このなかには片岩製石庖丁の素材や製作途中品が含まれている。石材の片岩は居住域から尾根を下って約1km北東方向を流れる中山川に由来する蓋然性が高い。以上の検討からは、明穂遺跡群では竪穴建物1～7棟程度で構成される複数の居住域で片岩製石庖丁の製作がおこなわれていたことがわかる。

(g) 玉津田中遺跡 砂岩製石庖丁の生産地

玉津田中遺跡は播磨平野東部の明石川流域に立地する。荒木幸治は、玉津田中遺跡における竪穴建物、墓、河道、その他の遺構の空間的な配置状況をまとめ、弥生時代中期中葉～後葉、および後期の集落構造に言及した(荒木2022、荒木ほか2022)。荒木によれば、中期中葉～後葉の竪穴建物はグループ(遺構分布)C・D・E・F・G・H・I・K・Mで確認されており、このうちグループC・E1・E2・Hは微高地上にあり竪穴建物が多く(荒木2022、p.110)、なかでも、方形周溝墓が隣

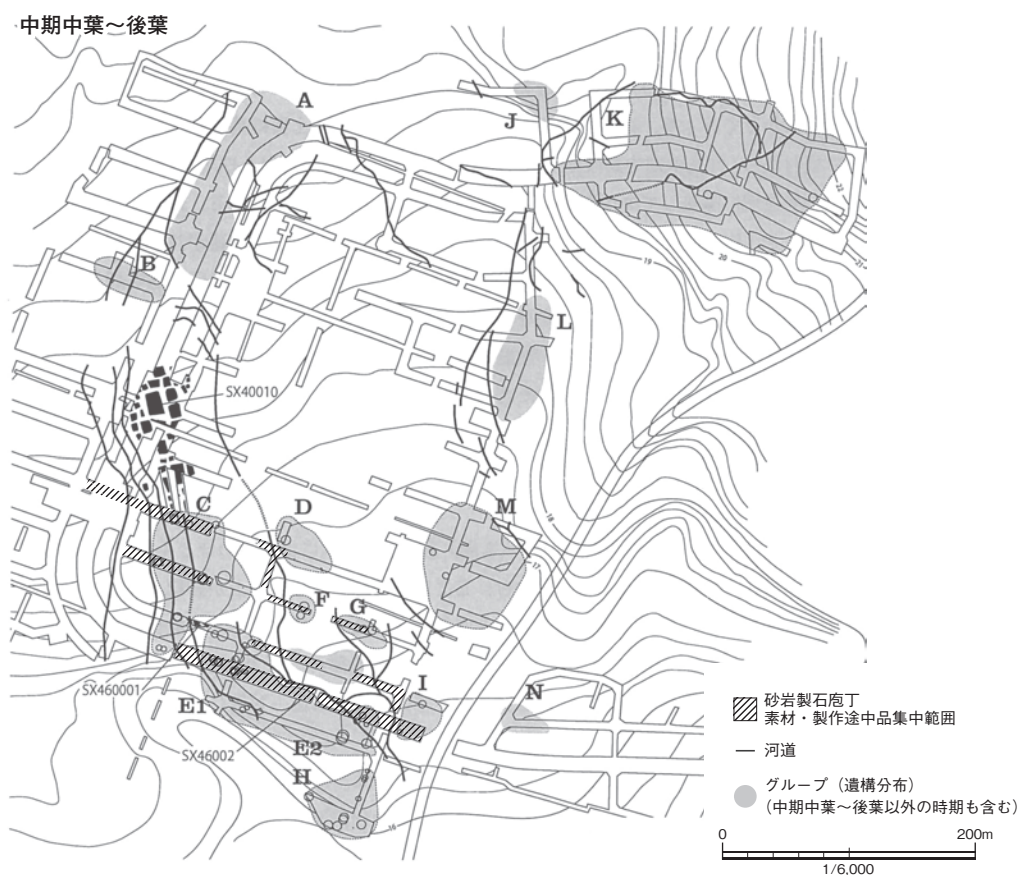


図9 玉津田中遺跡の居住域(荒木2022を一部改変)

接し、床面積80㎡以上の竪穴建物や掘立柱建物が認められるグループE1・E2が優位なグループとされる(荒木ほか2022、p.17)。グループE1で検出されている竪穴建物の重複関係や未調査の範囲などを考慮すれば、E1の同時併存建物は最大20棟程度の竪穴建物と若干の掘立柱建物になろうか。グループE2の同時併存竪穴建物は最大で10棟程度だろう。グループCでは竪穴建物8～10棟程度と若干の掘立柱建物、H区では竪穴建物8～10棟程度が最大同時併存と推測される。

玉津田中遺跡では砂岩製石庖丁が生産されており、その素材となる砂岩の「原石は遺跡周辺の河原で容易に手に入れることのできる薄く扁平な礫」(藤田1994、p.123)とされる。このため、砂岩は遺跡の西側を流れる明石川などで獲得された蓋然性が高い。砂岩製石庖丁の素材や製作途中品は、グループD・E1・E2・F・G・Iの自然河川や包含層、Cの包含層に集中している。自然河川出土の資料は周辺微高地上の居住域に伴うものであろう。

砂岩製石庖丁の素材、製作途中品の出土状況からは、グループC・E1・E2およびその周辺で砂岩製石庖丁の生産が集中的におこなわれていることになる。グループC・E1・E2はそれぞれ8～20棟前後の竪穴建物で構成されるため、主な石庖丁製作区域は居住遺構が集中する空間である点、さらには荒木による優位なグループを含む点は指摘できよう(図9)。

(3) 加工地と流通中継地の集落

(a) 川津一ノ又遺跡、東坂元北岡遺跡とその周辺 サヌカイト製石器の加工地

香川県坂出市川津一ノ又遺跡では低地に囲まれた微高地上に中期Ⅱ-1様式(中期中葉古相、ここでの時期は信里2005による)の竪穴建物2棟と掘立柱建物1棟が検出されている。調査地外も含めた推定170×100㎡ほどの微高地上が当該期の居住域とするならば(居住域①)、居住域を構成するのは竪穴建物2～5棟と掘立柱建物1～2棟程度と推測される。この微高地上と周囲の低地から多量のサヌカイト製剥片を中心とした石器が出土している。

香川県丸亀市東坂元北岡遺跡は低位段丘上に位置し、調査地から竪穴建物等は検出されていないものの、中期Ⅱ-1～Ⅱ-2様式(中期中葉)の土器が一定量出土しているため、調査地西方に居住域が推定される(居住域②)。東坂元北岡遺跡の調査地の一部からは多量のサヌカイト製剥片を中心とした石器が出土している。

香川県坂出市川津東山田遺跡は川津一ノ又遺跡の南方に位置する。遺構に伴わない中期Ⅱ-1様式(中期中葉)とみられる土器が微量出土しているため、調査地外の南方に小規模な居住域が存在すると考えられる(居住域③)。サヌカイト製石庖丁などの石器も出土しているが、伴う主体となる土器は後期前葉以降であるため、石器は後期の遺構に伴う可能性もある。

香川県丸亀市東坂元三ノ池遺跡は東坂元北岡遺跡の北方に位置する。調査地から竪穴建物などの建物は検出されていないが、中期Ⅱ-1～Ⅱ-2様式の土器が微量出土しているため、調査地の西方に小規模な居住域が推定される(居住域④)。遺構に伴わないサヌカイト製石庖丁などが少量出土しており、これらは中期Ⅱ-1～Ⅱ-2様式に帰属する可能性がある。

飯野山北麓から東麓にかけての大東川左岸の段丘上に展開する複数の居住域のうち、サヌカイト製石器の加工地である居住域①は推定でも竪穴建物2～5棟と掘立柱建物1～2棟程度であり、居

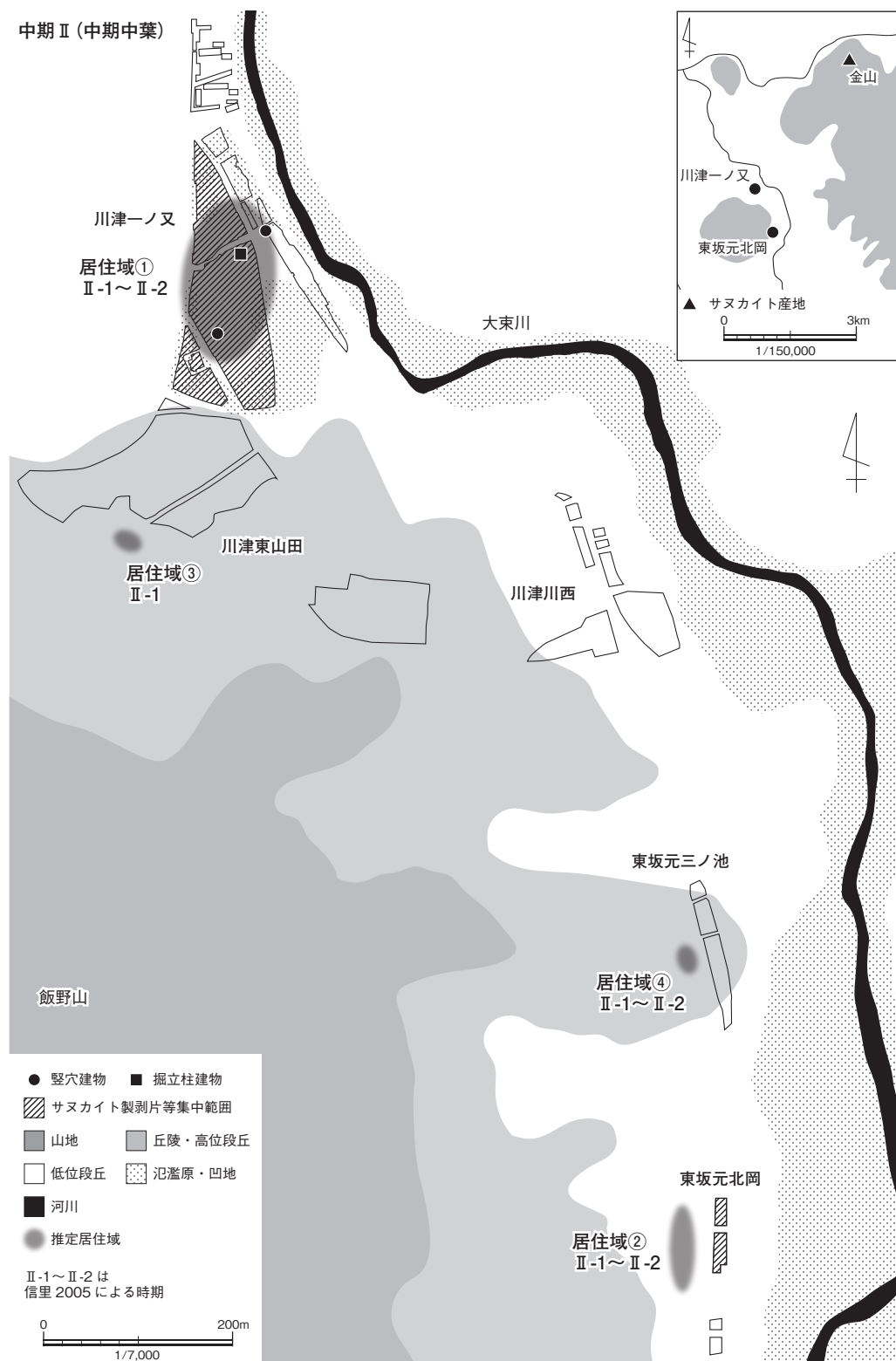


図 10 川津一ノ又遺跡、東坂元北岡遺跡周辺の居住域

住域②も居住域①と同程度か居住域①よりも小規模と考えられる。それぞれに近接する居住域③や居住域④もごく小規模と推測され、複数の小規模居住域が集落を構成し、その一部が板状剥片から石庖丁の完成品までの生産をおこない、他集落に搬出していたと理解できる(図10)。

(b) 池の奥遺跡周辺 片岩製片刃石斧、緑色岩製両刃石斧の流通中継地

香川県東かがわ市池の奥遺跡(本項で扱う遺跡はすべて香川県東かがわ市に所在する)は小規模な東谷川を挟んだ兩岸の丘陵斜面に位置する。中期Ⅱ様式(中期中葉、ここでの時期は信里2005による)には東谷川西岸の調査地に1棟の竪穴建物が存在する。東谷川西岸、東岸いずれもの調査地で時期不明の竪穴建物が認められ、遺構に伴わない土器も中期Ⅱ～Ⅲ様式(中期中葉～後葉)の幅がある。このため、西部調査地ではこの時期が確実な竪穴建物を中心とした居住域(居住域②)、東岸調査地では時期不明の竪穴建物を中心に居住域(居住域①)を設定できる。中期Ⅲ様式には西岸調査地で3棟、東岸調査地で5棟の竪穴建物が分布する。前段階と比較して建物の棟数が増加するうえ、遺構外出土器もこの時期のものが多。このため、西岸調査地、東岸調査地いずれも竪穴建物が分布する調査地とその周囲を含めた範囲に居住域を推測できる(居住域①・②)。なお、池の奥遺跡は斜面地で断片的または不明瞭な形状で残存する遺構が多く、これらの遺構が建物であった場合にはさらに建物数が増加することになる。西岸、東岸いずれの調査地からも青色片岩製片刃石斧が多量に出土している。

善門池西遺跡は尾根上と尾根を挟んだ東西の丘陵斜面で調査がおこなわれている。尾根の東側では中期Ⅱ様式(中期中葉)の竪穴建物1棟が検出されている。竪穴建物の上方でも同時期の土器が出土しているため、竪穴建物から調査地の南方にかけて小規模な居住域が推測される(居住域③)。尾根西側の調査地では建物はみられないが、中期Ⅱ様式の土器の少量の出土により、調査地の南方に小規模な居住域が存在すると考えられる(居住域④)。

谷遺跡では丘陵裾に中期Ⅲ様式の竪穴建物2棟が形成され、この竪穴建物を中心として居住域を設定できる(居住域⑤)。

成重遺跡は主に谷底平野に立地し、丘陵裾から図11の南を流下する湊川右岸の自然堤防までが調査地となっている。中期Ⅱ様式には調査地東半部に竪穴建物4棟が分布する。この調査地南端に位置する建物から、居住域は調査地外の南方にかけての範囲が推察される(居住域⑥)。居住域⑥から100m近い空閑地を挟んで調査地西半部に竪穴建物と掘立柱建物が計15棟分布する。(居住域⑦)。建物の重複状況や中期Ⅱ様式の編年細分などを考慮すると、居住域⑦では竪穴建物5～6棟、掘立柱建物5～6棟が併存していたと推測できる。中期Ⅲ様式の明確な建物は確認されていないが、東半部調査地南西端と西半部調査地南東端の付近を中心に同時期の遺物や遺構がみられるため、調査地の南方に居住域⑥を推定しておく。なお、遺物はわずかであることから中期Ⅲ様式の居住域⑥はごく小規模だろう。

池の奥遺跡周辺では、小規模な河川沿いに複数の居住域が展開する。池の奥遺跡の青色片岩製片刃石斧の時期特定は難しいが、竪穴建物の時期や土器の出土傾向を考慮すれば、中期Ⅱ様式よりも中期Ⅲ様式に属する比率が高そうである。この場合、池の奥遺跡(居住域①・②)は中期Ⅲ様

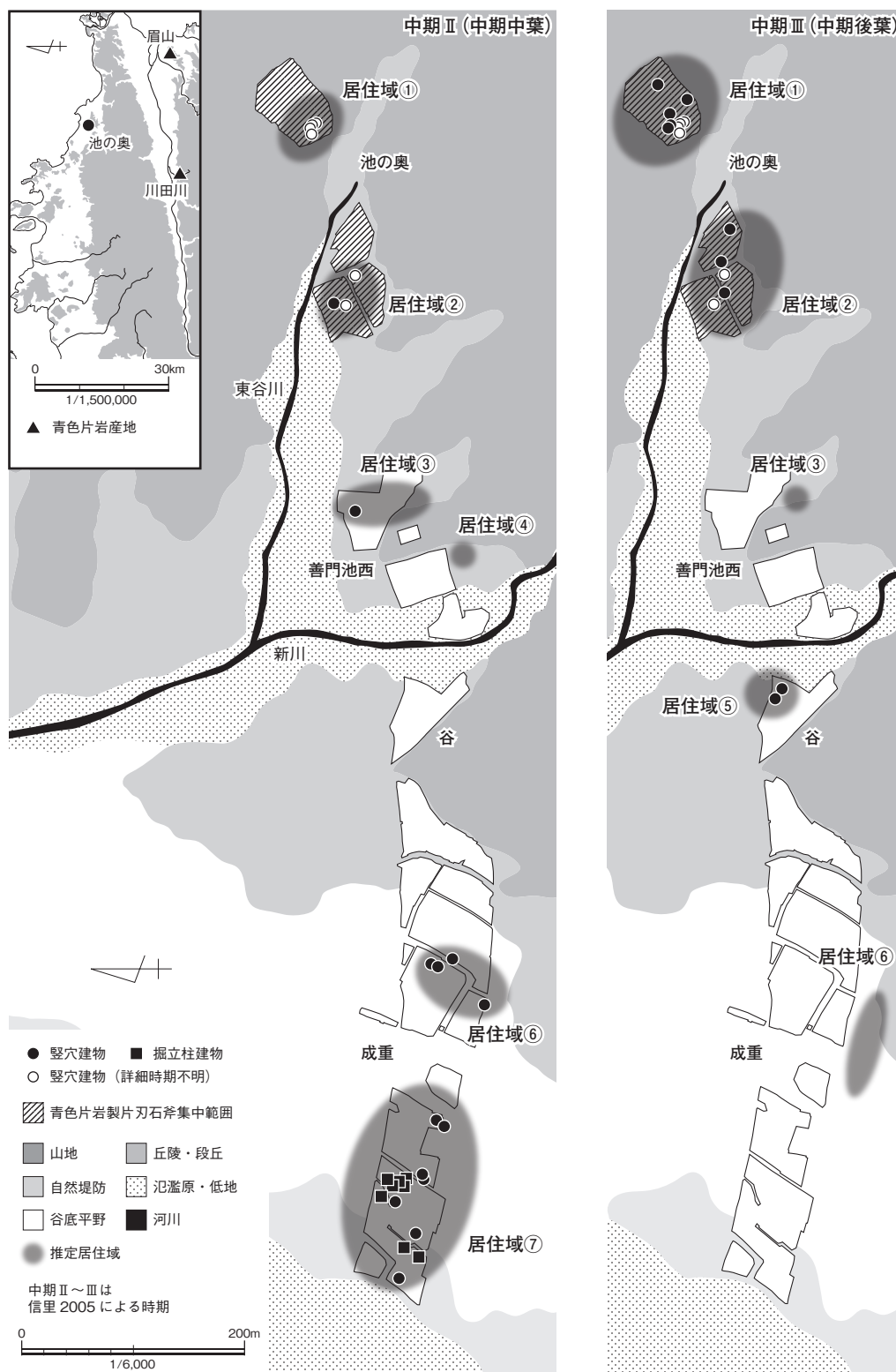


図 11 池の奥遺跡周辺の居住域

式(中期後葉)にかけて流通中継地としてより顕在化したいえる。中期Ⅱ様式には居住域⑥・⑦に少量の青色片岩製片刃石斧が認められ、これらは居住域②(および居住域①)から入手された可能性もある。しかし、中期Ⅲ様式には青色片岩製片刃石斧が集中する居住域①・②を除いたほかの居住域はごく小規模となる。流通中継地である居住域①・②の青色片岩製片刃石斧の搬出対象は周辺居住域というよりは、さらなる遠隔地であると理解できる(図11)。

5 石器の生産、流通にかかわる集落

(1) 大規模集落と生産地との関係

4で取り上げた集落には文京遺跡、玉津田中遺跡といった大規模集落が含まれており、それぞれ緑色片岩製石庖丁の生産地、砂岩製石庖丁の生産地である。瀬戸内地方における弥生時代中期中葉～後葉の大規模集落は限定的で、文京遺跡、玉津田中遺跡、香川県善通寺市旧練兵場遺跡にくわえて、中期前葉～中期中葉とやや時期がずれる南方遺跡^{*7}や、丘陵上に竪穴建物が密集する岡山県赤磐市用木山遺跡にその可能性が考えられる程度であるが、大規模集落はすべて生産地としての属性を備えているものなのだろうか。ここでは旧練兵場遺跡の状況を確認することで、大規模集落と生産地との関係について考えてみたい。

旧練兵場遺跡は、四国北東部、丸亀平野西部の扇状地に位置する。自然河川や凹地で画された複数の微高地にわたって弥生時代の遺構が広がり、その集落域は1000×500m程度(荒木ほか2022、p.110)と推定されている。旧練兵場遺跡での集住化が始まるのは弥生時代中期中葉で、以後、古墳時代前期前半まで集住は継続する。なお、もっとも集落が大規模化、密集化するのは後期前葉である。図12には、信里芳紀の研究成果(信里2009・2013)に基づいて中期後葉の竪穴建物、掘立柱建物などのまとまりを示している^{*8}。このまとまりは、信里2009では居住域、信里2013では単位および掘立柱建物群とされ、それぞれの意味する内容も異なるが、ここでは居住遺構のまとまりとしてとらえてその呼称を居住域に統一する。中期中葉～後葉、特に中期後葉には、後期ほどではないとはいえ、複数箇所に住居域が分布し、西部の一画では居住域が集中する点を読み取れる。このため、この時期の旧練兵場遺跡は通常集落とは異なり、大規模集落の様相を呈しているといえよう。調査地から出土しているサヌカイトの剥片は、中期中葉～後葉に限定できる資料が少ないものの、打法不明の剥片を除けばすべて両極打法剥片である^{*9}(図13)。よって、旧練兵場遺跡は金山産サヌカイト製石庖丁などの生産地や加工地とはいいがたい。中期中葉～後葉の自然河川からはサヌカイト製の大型スクレイパーが出土している(図14)。この大型スクレイパーは、剥離面末端に微細な剥離と顕著な摩耗痕が残るため、イネ科植物に対しての使用が推定されている。素材は20cmを超える大型剥片であり、旧練兵場遺跡にサヌカイト製の大型剥片が持ち込まれていることを示す。大型スクレイパーであっても使用後や欠損後には分割されて両極打法の石核に再生された可能性は十分にあり得る。剥片が両極打法剥片で占められ、5cm未満の石核に両極打法に伴う石核が目立つことも合わせて考慮すると、旧練兵場遺跡は乗松2020bで設定した遺跡類型のうちC1、本章で再設定した消費地に該当することになる。旧練兵場遺跡では、サヌカイトの大型剥片を分割して周辺の集落に搬出している可能性はあるものの、直接打法



○ 居住域、単位、掘立柱建物群 信里 2009・2013 による
 ※遺構、単位、掘立柱建物群は中期Ⅲ-3 (信里 2005)

図 12 旧練兵場遺跡 (香川県埋蔵文化財センター編 2013・2016 を一部改変)

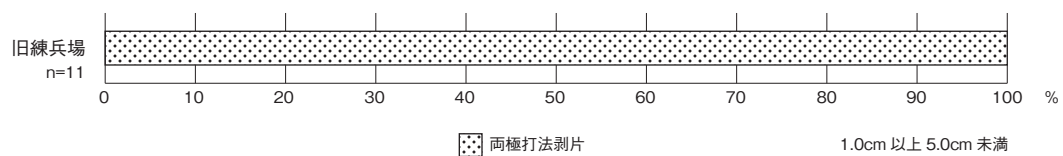


図 13 旧練兵場遺跡におけるサヌカイト製剥片の比率

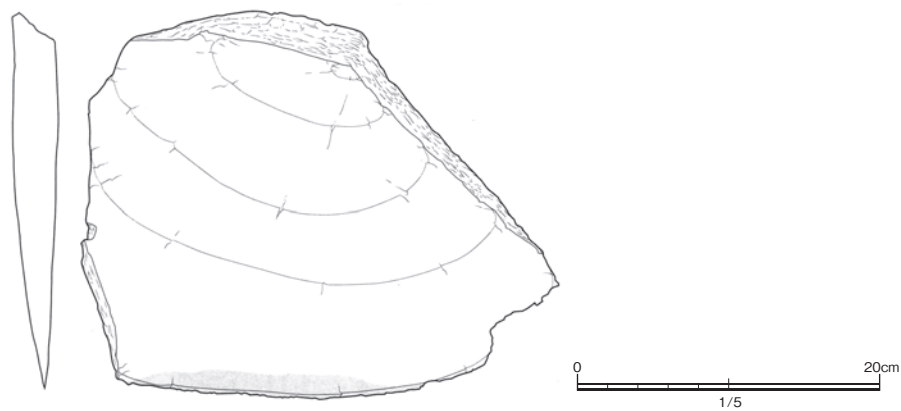


図 14 旧練兵場遺跡の大型剥片 (香川県埋蔵文化財センター編 2011)

などを駆使して石庖丁やその素材となる剥片の生産に関与した様子はいかがえない。また、中期に限定できる資料が少ないとはいえ、サヌカイト製の小型石器を除いて、他の石器製作を積極的に示す資料も認められない。

以上の検討からは、大規模集落は必ずしも生産地となり得ていないことになる。南方遺跡については火成岩製両刃石斧の生産地である蓋然性が高いものの、用木山遺跡では石庖丁や片刃石斧を製作した痕跡は認められない。また、文京遺跡や玉津田中遺跡は生産地であったとしても、製作された石庖丁の流通範囲は2～3平野程度であり、金山産サヌカイト製石器や青色片岩製片刃石斧のような広く面的に流通する石器の生産には関与しておらず、その加工地や流通中継地でもない。石材資源の獲得や石器製作技術の保持、石器の広域流通の掌握は大規模集落を構成する必須の要素とはなっていない。文京遺跡では石材産地から約10km離れているとはいえ直接、または別の集落を介して石庖丁の素材を入手できる環境にあり、玉津田中遺跡は石庖丁石材産地が至近にある。結局のところ、素材などの入手の可否が重要で、それが可能であれば、大規模集落の内部に石器の生産部門を抱えることになるのだろう。ただ、田崎が文京遺跡で想定したように(田崎2006、p.37)、石器の素材などの入手にあたって大規模集落が有する他の器物、たとえば土器や木製品などの流通を介した他集落との関係が利用されることは十分に考えられる。文京遺跡では、石庖丁のほか、土器や鉄器、ガラス装身具が生産され、それらは他の集落にも供給され(田崎2006、p.37)、玉津田中遺跡でも生産された木製品は他の集落へ搬出されたと考えられている(別府1996、p.322)。旧練兵場遺跡では吉備地域南部や豊前地域を故地とする搬入土器、または模倣土器が出土しているため(信里2011)、複数地域との交易がなされていたと推測される。こうした石器以外の器物に現れるような他集落との関係からは、通常規模の集落に比べると大規模集落が石器の生産や流通の機能を担いやすい傾向にはあるといえる。

(2) 石器の生産、流通にかかわる集落

一方で、3での検討からは生産地には大規模集落以外の集落の場合も複数あることが導かれる。石材産地の山腹に位置する長者原遺跡では竪穴建物数棟程度の居住域で、段丘上の比較的広い面に居住域が広がる丸山遺跡でも竪穴建物7～10棟程度、掘立柱建物1～2棟程度と、いずれも大規模集落には程遠い集落構成である。長者原遺跡や明穂遺跡群、桜ノ岡遺跡など石材産地に近い集落が比較的多く認められる点は、砂岩製石庖丁の生産地である玉津田中遺跡と類似する。金山産サヌカイト製石器で設定した加工地は石材産地から20km圏内の複数の集落で認められ、川津一ノ又遺跡や東坂元北岡遺跡は最大でも竪穴建物数棟～5棟、掘立柱建物1～2棟程度と小規模の居住域からなる集落である。3では取り上げていないが、同じく金山産サヌカイト製石器の加工地である多肥松林遺跡は複数の微高地上に竪穴建物や掘立柱建物が散在する集落で、規模の大きな集落とはいいがたい。青色片岩製片刃石斧の流通中継地である池の奥遺跡は、谷を挟んで位置する中期後葉の居住域二つを合わせても最大で竪穴建物8棟程度の集落と、大規模集落には該当しない。生産地は石材産地に近い場合が比較的多いという地理的な傾向は共通するが、集落規模の面では、通常規模の集落であっても大規模集落であっても認められる。一方で、加工地や流

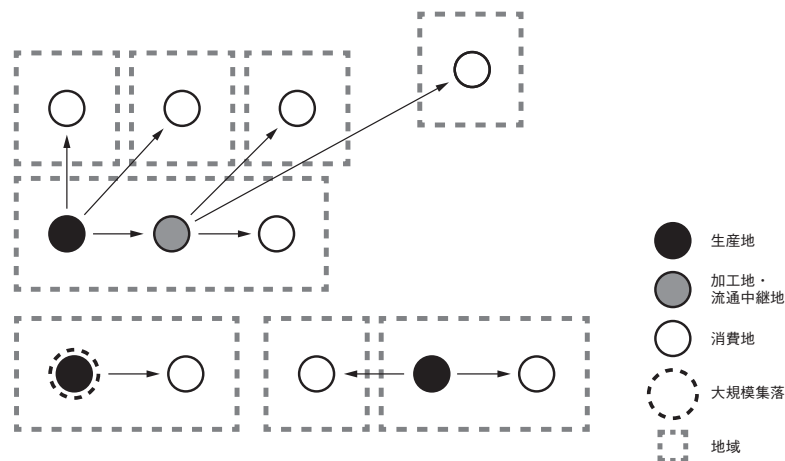


図 15 瀬戸内地方の弥生時代中期中葉～後葉における石器流通概念図

通中継地といった機能は通常規模、というよりはむしろ小規模な集落の一部に付帯している。以上の点に、これまでの検討結果(乗松2020b・2022・2023)も加味して瀬戸内地方における弥生時代中期中葉～後葉における石器の生産、流通とそれらにかかわる集落について概念図として示したのが図15である。瀬戸内地方東半部を中心に広く面的に流通する金山産サヌカイト製石器、青色片岩製片刃石斧には、生産地のほかに加工地や流通中継地が存在し、これらの集落も石器の流通に関与している。近隣への流通にとどまる砂岩製石庖丁や緑色片岩製片刃石斧などは生産地から消費地へ搬出される。大規模集落が担いするのは、後者の流通形態の石器の生産地に限られる。

なお、祝谷六丁場遺跡周辺や池の奥遺跡周辺のように、ある程度の範囲に小規模な居住域が複数形成されている場合、素材や製作途中品、完成品が集中するのは特定の居住域である。こうしたあり方は、集落または居住域に相当する「単位」が「機能的分化傾向にある」現象(森下1999、p.4)に合致する。大規模集落でも特定の居住域に生産域が集中するのは、機能を異にする複数居住域が集合した結果の反映であろう。また森下は、複数の集落で構成される「遺跡群」のなかでそれぞれの集落は「緩やかに機能分担」しており、各「遺跡群」には石器製作担当集落が存在するモデルを提示した(森下2005、p.85)。石器担当集落は、本稿での生産地や加工地に近い集落とみられるが、生産地や加工地は「遺跡群」に類する程度の複数集落のまとまりごとには存在するのではなく、限定的にしか存在しない^{*10}。このため、生産地、加工地は、周辺集落(森下の「遺跡群」に近い範囲に居住域が展開する集落)の外にも石器を搬出しているとみられる。こうした現象をふまえると、流通中継地までも含めた石器の生産、流通においては、緩やかな「機能分担」の一部は周辺集落にとどまらず、平野や地域の単位を超えた範囲において成立することになる。

おわりに

本稿では、石器の生産や流通にかかわる集落遺跡の検討から主に集落規模と石器の生産、流通との関係を考察してきた。石庖丁や石斧に限れば、瀬戸内地方では大規模集落であっても通常規

模の集落であっても生産や流通を担いいうことが確認された。従来の研究では大規模集落の分析から石器の生産や流通に言及される傾向にあったが、石器と集落との関係を考えるうえでは、規模の大小を問わず、さまざまな集落を検討の俎上にのせる必要があるだろう。

註

- *1 和島誠一が居住遺構としての堅穴が集まった堅穴群を「聚楽」としてとらえた視点(和島1934、p.7)を参考に、居住遺構(堅穴建物、掘立柱建物)の空間的なまとまりを居住域とし、居住域(文京遺跡の住居群や玉津田中遺跡のグループ、遺構分布を含む)のまとまりを集落とする。本稿での対象地域ではおおむね遺跡、遺跡群と対応する。
- *2 報告書で堅穴建物として報告されていても、堅穴建物としての蓋然性が低い遺構もある。本稿では、堅穴建物とされる遺構、またはそれに類する遺構のうち、壁溝や中央土坑、主柱穴といった堅穴建物が一般的に備える施設の一部が確認された遺構を堅穴建物とした。このため、ここで提示した堅穴建物数は、報告書に掲載された堅穴建物数と比べて増減する場合がある。
- *3 愛媛県今治市阿方遺跡の打製石剣などから金山型剥片の成立は中期前葉にさかのぼる可能性はある。また、矢ノ塚遺跡や久米池南遺跡など中期から後期前葉までの時期幅をもつ遺跡からも金山型剥片由来の石庖丁は出土しているが、確実に後期前葉といえる資料は認められない。ただ、金山型剥片、同剥片を素材とする石器の出土数が増加するのは中期中葉～後葉であるため、金山に散布する資料についてもほぼ中期中葉～後葉とみていいだろう。
- *4 たとえば、金山遺跡北第1地点では石庖丁の完成品ではなく金山型剥片の生産でとどめ、金山型剥片を金山の外に搬出、または金山の別地点に搬出する一方、長者原遺跡では石庖丁完成までの各工程をおこない、それぞれで生産された金山型剥片や石庖丁などを金山の外に搬出する可能性である。この可能性については、長者原遺跡以外の詳細なデータが得られた際に検討したい。
- *5 丸山遺跡では敲打段階と研磨段階の青色片岩製片刃石斧が出土しているが、青色片岩製片刃石斧は研磨工程直前(敲打工程完了)段階の資料も流通していると考えられるため、丸山遺跡を生産地とはみなしていない。
- *6 13次調査の西部とともに住居群を構成する2次調査の報告書は近年の刊行ではないため、緑色片岩製石庖丁の製作途中品や素材が報告書に掲載されていない可能性もある。
- *7 南方遺跡で推定される居住遺構の中心分布域や密集の程度については、扇崎由氏から教示を得た。
- *8 森下(森下2006)や渡邊誠(渡邊2022)による旧練兵場遺跡による集落構造の研究も参考にしている。
- *9 分析対象としたのはE区SR02下層出土の報告書掲載資料(石鏃)と未報告資料(剥片、石核、製品)である。
- *10 石鏃などの小型石器は多数の集落で生産されていると考えられ、小型石器に限れば、森下による遺跡群と石器担当集落の関係が成り立つ可能性はある。

参考文献

- 荒木幸治 2022「播磨地域における集落構造」『2021年度古代学研究会拡大例会・シンポジウム「弥生後期社会の実像 ―集落構造と地域社会―」』古代学研究会、pp.107-122
- 荒木幸治・伊藤淳史・桐井理揮・清水邦彦・瀬谷今日子・戸塚洋輔・中居和志・田中元浩・三好 玄・森岡秀人・山本 亮・渡邊 誠 2022「弥生後期社会の実像 ―集落構造と地域社会―」『古代学研究』233号、pp.3-28
- 梅木謙一 2000「伊予中部地域」菅原康夫・梅木謙一編『弥生土器の様式と編年―四国編―』木耳社、pp.211-282
- 加島次郎 2003「祝谷六丁場遺跡出土の両刃石斧について」『愛媛考古学』15、pp.70-83

- 近藤 玲 2004「阿波の弥生中期中葉～後期初頭の土器」埋蔵文化財研究会第53回研究集会実行委員会編『第53回埋蔵文化財研究集会 弥生中期の併行関係 発表要旨集』埋蔵文化財研究会第53回研究集会実行委員会、pp.301-322
- 柴田昌兎 2000「伊予東部地域」菅原康夫・梅木謙一編『弥生土器の様式と編年—四国編—』木耳社、pp.283-366
- 柴田昌兎 2002「瀬戸内海燧灘南岸の中期弥生集落 その1 —中期後半丘陵性集落の動態—」古代吉備研究会委員会編『環瀬戸内海の考古学 —平井勝氏追悼論文集—』古代吉備研究会、pp.327-342
- 田崎博之 2006「四国・瀬戸内における弥生集落—愛媛県文京遺跡の密集型大規模集落、北部九州との比較—」日本考古学協会2006年度愛媛大会実行委員会編『日本考古学協会2006年度愛媛大会研究発表資料集』日本考古学協会2006年度愛媛大会実行委員会、pp.17-44
- 寺前直人 2002「工具—石斧」北條芳隆・欄宜田佳男編『考古資料大観第9巻 弥生・古墳時代 石器・石製品・骨角器』小学館、pp.190-194
- 信里芳紀 2009「旧練兵場遺跡を描くにあたっての二、三の問題」『香川県埋蔵文化財センター研究紀要』V、pp.1-17
- 信里芳紀 2011「旧練兵場遺跡における外来系土器」香川県埋蔵文化財センター編『旧練兵場遺跡Ⅱ』香川県教育委員会ほか、pp.444-462
- 信里芳紀 2013「縄文後期から古墳前期の遺構変遷とその特徴」香川県埋蔵文化財センター編 2013『旧練兵場遺跡Ⅲ』香川県教育委員会ほか、pp.152-188
- 乗松真也 2020a「弥生時代中期の備讃瀬戸沿岸におけるサヌカイト製石器生産」『古文化談叢』第85集、pp.133-151
- 乗松真也 2020b「弥生時代中期における金山産サヌカイト製石器の流通」「片桐さん」退職記念論集刊行会編『さぬき野に種をまく』『片桐さん』退職記念論集刊行会、pp.13-28
- 乗松真也 2022「弥生時代中期瀬戸内地方における石庖丁流通の特質 —四国北西部に分布する片岩製石庖丁の検討から—」『考古学研究』第68巻第4号、pp.53-71
- 乗松真也 2023「弥生時代中期瀬戸内地方における石斧の生産と流通」『香川考古』(予定)
- 藤田 淳 1994「石器」兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所編『玉津田中遺跡 —第1分冊—』兵庫県教育委員会、pp.118-131
- 藤田 淳 2011「玉津田中遺跡における出土石器の生産と流通」第11回播磨考古学研究集会事務局編『石器からみた弥生時代の播磨 —第11回播磨考古学研究集会の記録—』第11回播磨考古学研究集会事務局、pp.35-51
- 別府洋二 1996「弥生時代中期の木製品生産について」兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所編『玉津田中遺跡 —第6分冊—』兵庫県教育委員会、pp.314-325
- 森下英治 2005「弥生時代における金山サヌカイト原産地の利用状況について —弥生時代中期における金山型剥片剥離技術出現の意義—」『第19回古代学協会四国支部研究大会 原産地遺跡から時代を読む 発表資料集』、pp.83-91
- 森下英治 2006「瀬戸内の大規模密集型集落 —香川県旧練兵場遺跡と周辺遺跡—」日本考古学協会2006年度愛媛大会実行委員会編『日本考古学協会2006年度愛媛大会研究発表資料集』日本考古学協会2006年度愛媛大会実行委員会、pp.45-62
- 和島誠一 1938「東京市内志村に於ける原始時代竪穴の調査予報」『考古学雑誌』第28巻第9号、pp.1-11
- 渡邊 誠 2022「讃岐地域における弥生時代後期の集落構造 ～旧練兵場遺跡を事例として～」『2021年度古代学研究会拡大例会・シンポジウム「弥生後期社会の実像 —集落構造と地域社会—」』古代学研究会、pp.91-106

遺跡文献(発掘調査報告書の書名の一部については省略)

兵庫県

玉津田中遺跡 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所編 1994『玉津田中遺跡―第1分冊―』兵庫県教育委員会／兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所編 1994『玉津田中遺跡―第2分冊―』兵庫県教育委員会／兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所編 1996『玉津田中遺跡―第5分冊―』兵庫県教育委員会／兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所編『玉津田中遺跡 ―第6分冊―』兵庫県教育委員会／荒木幸治 2022「播磨地域における集落構造」『2021年度古代学研究会拡大例会・シンポジウム「弥生後期社会の実像 ―集落構造と地域社会―」』古代学研究会、pp.107-122／荒木幸治・伊藤淳史・桐井理揮・清水邦彦・瀬谷今日子・戸塚洋輔・中居和志・田中元浩・三好 玄・森岡秀人・山本 亮・渡邊 誠 2022「弥生後期社会の実像 ―集落構造と地域社会―」『古代学研究』233号、pp.3-28

岡山県

南方遺跡 岡山市教育委員会文化財課編 2012『南方(後楽館)遺跡』岡山市教育委員会／岡山市埋蔵文化財センター編 2018『南方遺跡 ―岡山済生会病院新病院建設に伴う発掘調査―』岡山市教育委員会 用木山遺跡 神原英朗編 1977『岡山県営山陽新住宅市街地開発事業用地内埋蔵文化財発掘調査概報第4集』岡山県山陽町教育委員会

徳島県

大谷尻遺跡 徳島県埋蔵文化財センター編 2005『大谷尻遺跡』徳島県教育委員会ほか 桜ノ岡遺跡 徳島県埋蔵文化財センター編 1993『四国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告3』徳島県教育委員会ほか 丸山遺跡 徳島県埋蔵文化財センター編 2003『丸山遺跡』徳島県教育委員会ほか

香川県

池の奥遺跡 香川県埋蔵文化財調査センター編 2003『池の奥遺跡 金毘羅山遺跡』香川県教育委員会ほか 金山遺跡 丹羽祐一・藤好史郎・森下英治 2017「金山遺跡」坂出市史編さん所編『『坂出市史』資料補遺 考古篇』坂出市 川津一ノ又遺跡 香川県埋蔵文化財センター編 1997『川津一ノ又遺跡Ⅰ』香川県教育委員会ほか／香川県埋蔵文化財センター編 1998『川津一ノ又遺跡Ⅱ』香川県教育委員会ほか 川津東山田遺跡 香川県埋蔵文化財調査センター編 2001『川津東山田遺跡Ⅰ区』香川県教育委員会ほか／香川県埋蔵文化財調査センター編 2002『川津東山田遺跡Ⅱ区』香川県教育委員会ほか 旧練兵場遺跡 香川県埋蔵文化財センター編 2011『旧練兵場遺跡Ⅱ(第19次調査)』香川県教育委員会ほか／香川県埋蔵文化財センター編 2013『旧練兵場遺跡Ⅲ』香川県教育委員会ほか／香川県埋蔵文化財センター編 2016『旧練兵場遺跡Ⅶ』香川県教育委員会／信里芳紀 2009「旧練兵場遺跡を描くにあたっての二、三の問題」『香川県埋蔵文化財センター研究紀要』Ⅴ、pp.1-17 善門池西遺跡 香川県埋蔵文化財調査センター編 2004『善門池西遺跡』香川県埋蔵文化財調査センター 谷遺跡 香川県埋蔵文化財調査センター編 2004『谷遺跡』香川県埋蔵文化財調査センター 多肥松林遺跡 財団法人香川県埋蔵文化財センター編 1999『多肥松林遺跡』香川県教育委員会ほか／香川県埋蔵文化財センター編 2017『多肥松林遺跡』香川県教育委員会 長者原遺跡 沢井静芳 1979「長者原遺跡」香川県教育委員会編『香川県埋蔵文化財調査年報』香川県教育委員会 成重遺跡 香川県埋蔵文化財調査センター編 2004『成重遺跡Ⅰ』香川県教育委員会ほか／香川県埋蔵文化財調査センター編 2005『成重遺跡Ⅱ』香川県教育委員会ほか 東坂元北岡遺跡 香川県埋蔵文化財

センター編 2016『東坂元北岡遺跡 飯山北土居遺跡』香川県教育委員会 東坂元三ノ池遺跡 香川県埋蔵文化財調査センター編 2008『東坂元三ノ池遺跡』香川県教育委員会

愛媛県

明穂遺跡群 愛媛県埋蔵文化財調査センター編 1995『明穂東岡遺跡 明穂Ⅰ 東岡東遺跡 明穂東岡Ⅱ遺跡 明穂中ノ岡Ⅲ遺跡』愛媛県埋蔵文化財調査センター **祝谷アイリ遺跡** 松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター編 1992『祝谷アイリ遺跡』松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター **祝谷大地ヶ田遺跡** 愛媛県埋蔵文化財調査センター編 1989『一般県道「菅沢—松山線」埋蔵文化財調査報告書』愛媛県埋蔵文化財調査センター／松山市教育委員会編 1994『道後城北遺跡群Ⅱ』松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター **祝谷西山遺跡** 愛媛県埋蔵文化財調査センター編 2002『祝谷西山遺跡 埋蔵文化財発掘調査報告書』愛媛県埋蔵文化財調査センター **祝谷畑中遺跡** 愛媛県埋蔵文化財調査センター編 2002『土居窪遺跡2次 祝谷畑中遺跡 祝谷本村遺跡2次埋蔵文化財調査報告書』愛媛県埋蔵文化財調査センター／松山市教育委員会編 2011『祝谷畑中遺跡2次調査 道後今市遺跡2次調査 道後今市遺跡11次調査』松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター **祝谷本村遺跡** 松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター編 1992『道後城北遺跡群』松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター／愛媛県埋蔵文化財調査センター編 2002『土居窪遺跡2次 祝谷畑中遺跡 祝谷本村遺跡2次』愛媛県埋蔵文化財調査センター **祝谷丸山遺跡** 愛媛県埋蔵文化財調査センター編 1989『一般県道「菅沢—松山線」埋蔵文化財調査報告書』愛媛県埋蔵文化財調査センター／愛媛県埋蔵文化財調査センター編 1990『一般県道「菅沢—松山線」埋蔵文化財調査報告書Ⅱ』愛媛県埋蔵文化財調査センター **祝谷六丁場遺跡** 愛媛県埋蔵文化財調査センター編 1989『一般県道「菅沢—松山線」埋蔵文化財調査報告書』愛媛県埋蔵文化財調査センター／松山市教育委員会編 1991『祝谷六丁場遺跡』松山市教育委員会ほか **土居窪遺跡** 愛媛県埋蔵文化財調査センター編 2002『土居窪遺跡2次 祝谷畑中遺跡 祝谷本村遺跡2次埋蔵文化財調査報告書』愛媛県埋蔵文化財調査センター **文京遺跡** 愛媛大学埋蔵文化財調査室編 1991『文京遺跡第10次調査』愛媛大学埋蔵文化財調査室／松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター編 1992『文京遺跡第 一2・3・5次調査一』愛媛大学／田崎博之編 2004『文京遺跡Ⅲ 一文京遺跡第13次調査報告一』愛媛大学埋蔵文化財調査室／田崎博之 2006「四国・瀬戸内における弥生集落—愛媛県文京遺跡の密集型大規模集落、北部九州との比較—」日本考古学協会2006年度愛媛大会実行委員会編『日本考古学協会2006年度愛媛大会研究発表資料集』日本考古学協会2006年度愛媛大会実行委員会、pp.17-44／吉田広編 2005『文京遺跡Ⅳ 一文京遺跡第20次調査—文京遺跡第23次調査一』愛媛大学埋蔵文化財調査室／吉田広編 2013『文京遺跡Ⅶ-4 一文京遺跡第16次調査B区一』愛媛大学埋蔵文化財調査室／田崎博之編 2014『文京遺跡Ⅶ-3 一文京遺跡第16次調査B区一』愛媛大学埋蔵文化財調査室／田崎博之編 2019『文京遺跡Ⅶ-1一文京遺跡12次調査一』愛媛大学埋蔵文化財調査室／吉田広編 2020『文京遺跡Ⅶ-2 一文京遺跡第14次調査一』愛媛大学埋蔵文化財調査室

図出典

図1～3・5～8・10・14・15 筆者作成／図4 田崎2006を一部改変／図9 荒木2022を一部改変／図11 筆者作成、微地形の復元は香川県埋蔵文化財調査センター編2004による／図12 香川県埋蔵文化財センター編2013・2016を合成して一部改変／図13 実測図は香川県埋蔵文化財センター編2011からの引用

(2023年3月29日)